

会

報

社団法人 日本病理学会
 〒113-0033
 東京都文京区本郷2-40-9
 ニュー赤門ビル4F
 TEL: 03-5684-6886
 FAX: 03-5684-6936
 E-mail jsp@ma.kcom.ne.jp
 http://jsp.umin.ac.jp/

社団法人日本病理学会

第184号 平成15年(2003年)5月刊

1. 平成15年度海外派遣研究員の募集について

社団法人日本病理学会は、日本病理学会会員が国際的視野を養い病理学研究、診断業務の発展に貢献できるよう務めてきています。特に従来からイギリス、ドイツ両病理学会とは、日本病理学会総会、英・独各学会総会、IAP総会等の席を通じて学術的交流が行われてきました。

このたび、このような中でさらに両学会の深い絆が築かれるようドイツ病理学会の配慮があり、日本からの留学に際して奨学金が用意されました。

これを受けて、本学会国際交流委員会は、今年度の事業としてドイツ病理学会と若手病理専攻者の海外派遣研究員の交換事業を行うことにしましたので、まず留学希望者を下記の要領で募集いたします。

本事業で留学先や留学期間等が未定のところは、応募者と受入相手方との協議により決めていくことになります。今までドイツとの交流のある方はもとより、これから積極的に接してみようと思う方は本委員会に相談いただきたいと思っています。

記

1. 留学先: ドイツの大学(ある程度本人の希望が叶えられる予定)。
2. 留学期間: 今夏以降からで期間未定(例えば、6ヶ月、9ヶ月、1年等の設定は、ある程度本人の希望が叶えられる予定)。
3. 応募資格: 40歳未満(応募時)の日本病理学会会員である学術評議員。
4. 募集人員: 原則として1名。
5. 奨学金総額: 20,000ユーロ(約260万円)
6. 応募締切: 平成15年6月30日、本学会事務局まで。
7. 決定時期: 平成15年7月上旬
8. その他:
 - 国際交流委員会で候補者を選考し、理事会において決定いたします。
 - 応募にあたっては、別途、様式及び留学先教授リストを用意してありますので、本学会事務局までお申し出ください。なお、所定の様式は、本学会

ホームページよりダウンロードできますし、リストもご覧になれます。

○本件についてご質問がありましたら、国際交流委員長もしくは本学会事務局までお問い合わせください。

○一方、ドイツからの受入れ可能な機関がありましたら早めにご一報ください。

国際交流委員長(恒吉正澄):

TEL 092-642-6061 FAX 092-642-5968

社団法人日本病理学会事務局:

TEL 03-5684-6886 FAX 03-5684-6936

同 ホームページ: <http://jsp.umin.ac.jp/>

2. 病理専門医資格更新者氏名

第5回 認定 86名

更新期間 平成15年(2003年)4月1日から5年間

認定番号	氏名		
998	建部 敦	1030	宮本 祐一
1000	橋本 公夫	1032	奥村 晃久
1001	北市 正則	1033	清水 英男
1002	谷野 幹夫	1034	新宅 雅幸
1003	鳥山 寛	1035	林 透
1005	橋詰 良夫	1036	片山 正一
1006	工藤 玄恵	1039	船田 信顕
1008	磯田幸太郎	1042	岡本 賢三
1009	若田 泰	1043	柳下 三郎
1010	古田 格	1044	二ノ村信正
1012	川口 隆憲	1045	賀来 亨
1013	岩瀬 裕郷	1047	北村 成大
1015	青笹 克之	1049	小林 楨雄
1017	猪山 賢一	1050	服部 隆則
1018	森内 昭	1051	河野 正
1019	辻 求	1055	菅原 勇
1020	横山 繁生	1056	佐々木真由美
1022	堀江 弘	1057	森野 英男
1024	古谷 敬三	1058	宮内 潤
1027	宮本 誠	1059	杉原 志朗
1028	渡辺 正秀	1062	関谷 政雄

1064	奥田信一郎	1098	徳永 藏	1359	近藤 信夫	1374	池上 雅博
1065	本山 悌一	1099	伊藤 信夫	1360	中村 宣子	1376	門田 永治
1067	菊井 正紀	1101	興梠 隆	1361	中野 龍治	1377	増田 信二
1068	草間 博	1104	福里 利夫	1362	小山田正人	1379	下川 功
1069	岩渕 啓一	1110	佐藤 昇志	1363	佐藤 英俊	1380	梶村 春彦
1070	山本 暁	1111	古賀 誠	1364	杉江 茂幸	1382	高橋 聖之
1072	西田 俊博	1112	石黒 公雄	1366	高野 康雄	1383	高松 哲郎
1073	荻野 哲朗	1113	秋月真一郎	1367	竹下 盛重	1384	山崎 等
1075	蟹澤 成好	1117	小林 晏	1368	滝本 寿郎	1385	江原 孝史
1076	森山 伸一	1118	滝澤登一郎	1369	辻本 正彦	1386	島田 修
1077	望月 洋一	1119	内間 良二	1370	吉見 直己	1387	篠原 直宏
1078	村岡 俊二	1120	立野 紘雄	1371	湯田 文朗	1388	藤田 美俐
1080	手島 伸一	1121	長沢 孝明	1372	吉野 正	1389	一迫 玲
1081	上山 義人	1122	花田 正人	1373	濱崎 周次		
1083	若林 淳一	1127	中本 周				
1084	松本 俊治	1129	高桑 俊文				
1086	間野 正平	1130	宮原 晋一				
1087	原武 讓二	1131	池原 進				
1090	自見 厚郎	1134	安原 正博				
1091	熊谷久治郎	1137	平間 元博				
1095	成田 竹雄	1138	高見 剛				
1097	鹿毛 政義	1139	天野 殖				

第10回 認定 70名

更新期間 平成15年(2003年)4月1日から5年間

認定番号	氏名		
1310	安藤 政克	1335	寺田 忠史
1311	川口 研二	1336	浦田 洋二
1313	窪澤 仁	1337	河原 栄
1315	里 悌子	1338	中野 盛夫
1316	門間 信博	1339	伊藤 誠
1317	西上 隆之	1340	佐賀 信介
1318	廣瀬 隆則	1342	前田 邦彦
1319	山科 元章	1343	佐藤 昌明
1320	深山 正久	1344	島 寛人
1322	和田 了	1346	矢花 正
1323	堀内 隆三	1347	横瀬 喜彦
1324	福田 精二	1348	山川 光徳
1325	中西 邦昭	1349	坂田 一美
1326	菅野 純	1350	清水 亨
1327	伊藤 雅文	1351	上原 敏敬
1328	逸見 明博	1353	赤羽 久昌
1329	佐藤いづみ	1354	臺丸 裕
1330	山本 洋介	1355	深澤雄一郎
1331	今井田克己	1356	権藤 俊一
1333	市原 周	1357	平林かおる
1334	長廻 鍊	1358	笠井 潔

第15回 認定 48名

更新期間 平成15年(2003年)4月1日から5年間

認定番号	氏名		
1627	梅北 善久	1654	酒井 尚雄
1628	小島 英明	1655	辻村 亨
1629	神尾多喜浩	1657	新垣 京子
1630	桑原 宏子	1658	梅村しのぶ
1631	藤井 丈士	1659	鈴木 忍
1633	田村 元	1660	堀真 佐男
1635	加藤 弘之	1662	大西 博三
1636	増田 友之	1663	田崎 和洋
1637	奈良 佳治	1664	折笠 英紀
1638	八十嶋 仁	1665	長嶋 洋治
1639	松下能 文	1666	若山 恵
1640	小川 博	1667	太田 浩良
1641	落合 淳志	1668	秋山 太
1642	金井 信行	1669	岩木 宏之
1643	林徳 真吉	1670	二階堂 孝
1644	岩田 仁	1671	横崎 宏
1645	春日井 務	1672	山田 茂樹
1646	望月 眞	1673	山城 勝重
1647	中島 収	1674	鍋島 一樹
1648	加藤 厚郎	1676	近藤 福雄
1649	坪田ゆかり	1677	丸塚 浩助
1650	稲山 嘉明	1678	河野 裕夫
1652	谷澤 徹	1679	山本 智子
1653	福田 敏郎	1680	中島 正光

第20回 認定 66名

更新期間 平成15年(2003年)4月1日から5年間

認定番号	氏名		
1950	渡辺 次郎	1951	生沼 利倫

1952	小見山祐一	1986	古川 徹
1953	三富 弘之	1987	小宮山 明
1954	原 明	1988	大谷 博
1955	田中さゆり	1989	加藤 俊男
1956	大城真理子	1990	山内 直子
1957	原田 大	1991	井出 良浩
1958	楯玄 秀	1992	伊藤 彰彦
1959	山本 隆嗣	1993	山元 紀子
1960	出射 由香	1994	齋藤 生朗
1961	李康 弘	1995	森井 英一
1962	山田 章彦	1996	齊尾 征直
1963	杉田 保雄	1997	橋本 修一
1964	山内 周	1998	阿部 光文
1965	元井 亨	1999	津浦 幸夫
1966	原田 憲一	2000	三上 哲夫
1967	清塚 康彦	2001	喜友名正也
1968	長田 道夫	2002	有馬 信之
1969	堂本 英治	2003	藤吉 行雄
1970	羽賀 博典	2004	畠中 真吾
1971	横尾 英明	2005	野沢 昭典
1972	元井 紀子	2006	河原 邦光
1973	佐藤 仁哉	2007	小野 祐子
1974	鷹橋 浩幸	2008	前島 威人
1975	布村 眞季	2010	松岡健太郎
1976	岡本 清尚	2011	伊藤 智雄
1977	小山 正道	2012	市川 徹郎
1978	高崎 隆志	2013	橋本 優子
1979	山口 正明	2014	味岡 洋一
1981	鈴木 貴	2015	槇 政彦
1983	山岸晋一朗	2016	成田 道彦
1984	加藤 雅子	2017	駄阿 勉
1985	栗脇 一三	2018	伊禮 功

第3回 認定 2名

更新期間 平成15年(2003年)4月1日から3年間

認定番号 氏名

621 北村 創 788 木村 雄二

第7回 認定 1名

更新期間 平成15年(2003年)4月1日から2年間

認定番号 氏名

1196 埴岡 啓介

第14回 認定 2名

更新期間 平成15年(2003年)4月1日から4年間

認定番号 氏名

1606 能登原憲司 1613 渥美伸一郎

第18回 認定 3名

更新期間 平成15年(2003年)4月1日から3年間

認定番号 氏名

1834 安田 大成 1846 村雲 芳樹
1841 菅野 祐幸**第19回 認定 1名**

更新期間 平成15年(2003年)4月1日から4年間

認定番号 氏名

1891 平岡 伸介

3. 口腔病理専門医資格更新者氏名**第5回 認定 9名**

更新期間 平成15年(2003年)4月1日から5年間

認定番号 氏名

68 竹内 宏 74 伊集院直邦
69 仙波伊知郎 76 横瀬 敏志
70 池田 通 77 鈴木 誠
72 向後 隆男 78 西川 哲成
73 小林 家吉**第10回 認定 5名**

更新期間 平成15年(2003年)4月1日から5年間

認定番号 氏名

89 熊本 裕行 92 伊藤 玲子
90 佐藤 泰生 93 成田 信
91 岸野 万伸**4. 平成15年度認定病院更新機関**(第2, 4, 6, 8, 10, 12, 14, 16, 18, 20, 22, 24回
148病院)

期間2年間 平成15年4月1日～平成17年3月31日

第2回 認可(14施設)

認定番号 病院名

2005 山形県立中央病院
2006 (財)竹田総合病院
3019 埼玉県立がんセンター
3020 (財)癌研究会附属病院
3021 J R東京総合病院
3022 国家公務員共済組合連合会
虎の門病院
3023 国立相模原病院
4007 新潟市民病院
4008 名古屋第一赤十字病院
4009 国立金沢病院
5009 大阪府立病院

5010 労働福祉事業団大阪労災病院
7002 九州厚生年金病院
7003 国立病院九州がんセンター

第4回 認可 (2施設)

認定番号 病院名
3028 日本赤十字社医療センター
4010 長野県厚生農業協同組合連合会
佐久総合病院

第6回 認可 (6施設)

認定番号 病院名
3035 越谷市立病院
3037 社会保険船橋中央病院
3039 総合病院国保旭中央病院
3040 東京都立清瀬小児病院
4015 長野赤十字病院
5017 奈良県立奈良病院

第8回 認可 (9施設)

認定番号 病院名
3045 公立学校共済組合関東中央病院
3046 東京都立府中病院
4017 静岡県立総合病院
4018 社会保険中京病院
5019 (財)日本生命済生会附属日生病院
5020 兵庫県立西宮病院
5021 兵庫県立淡路病院
6017 広島市立安佐市民病院
7009 佐賀県立病院好生館

第10回 認可 (10施設)

認定番号 病院名
3002 群馬県立がんセンター
3052 伊勢崎市民病院
3054 東京都済生会中央病院
4024 長岡赤十字病院
4025 富士市立中央病院
4026 聖隷福祉事業団総合病院
聖隷浜松病院
4027 富山県立中央病院
5012 (財)住友病院
5025 大阪府立母子保健総合医療センター
7011 北九州市立医療センター

第12回 認可 (12施設)

認定番号 病院名
1008 北海道厚生連
総合病院帯広厚生病院
2012 (財)宮城厚生協会坂総合病院
3060 (株)日立製作所日立総合病院
3061 東京歯科大学市川総合病院
3062 東京都立墨東病院
3063 公立昭和病院
3064 恩賜財団済生会
横浜市南部病院
4030 公立陶生病院
6019 松山赤十字病院
7012 特定医療法人雪の聖母会
聖マリア病院
7013 熊本市立熊本市民病院
7014 宮崎県立宮崎病院

第14回 認可 (12施設)

認定番号 病院名
1009 社会福祉法人函館厚生院
函館五稜郭病院
2015 (財)温知会総合会津中央病院
3069 茨城県立中央病院
3070 医療法人社団千葉県勤労者医療協会
船橋二和病院
3071 東京都立大塚病院
3072 東京警察病院
3073 医療法人社団健生会
立川相互病院
4034 藤枝市立総合病院
4035 松波総合病院
4036 三重県厚生農業協同組合連合会
鈴鹿中央総合病院
5033 NTT西日本大阪病院
6021 広島赤十字・原爆病院

第16回 認可 (7施設)

認定番号 病院名
1010 厚生連総合病院旭川厚生病院
2016 山形市立病院済生館
2017 盛岡赤十字病院
3076 労働福祉事業団東京労災病院
3077 労働福祉事業団横浜労災病院
5037 医療法人医仁会武田総合病院
7017 大牟田市立総合病院

第18回 認可 (13施設)

認定番号	病院名
3079	総合病院土浦協同病院
3080	さいたま市立病院
3081	国立がんセンター東病院
3082	国家公務員共済組合連合会 横浜栄共済病院
4016	総合病院名古屋第二赤十字病院
4042	黒部市民病院
4043	豊橋市民病院
4045	小牧市民病院
5040	大阪市立総合医療センター
5041	労働福祉事業団 関西労災病院
6023	島根県立中央病院
6024	高松赤十字病院
7019	佐世保市立総合病院

第20回 認可 (5施設)

認定番号	病院名
3085	医療法人社団木下会 千葉西総合病院
3086	東京都立荏原病院
4047	聖隷三方原病院
5043	市立岸和田市民病院
5044	国立神戸病院

第22回 認可 (42施設)

認定番号	病院名
1011	総合病院旭川赤十字病院
1012	国家公務員共済組合連合会 幌南病院
2009	労働福祉事業団福島労災病院
2021	国立弘前病院
2022	東北労災病院
2023	仙台市立病院
2024	東北厚生年金病院
2025	石巻赤十字病院
2026	秋田赤十字病院
3048	さいたま赤十字病院
3051	横須賀市立市民病院
3091	栃木県厚生農業協同組合連合会 下都賀総合病院
3092	茨城県済生会水戸済生会総合病院
3093	労働福祉事業団鹿島労災病院
3095	千葉労災病院
3096	東京都立大久保病院
3097	医療法人財団河北総合病院
3099	社会福祉法人恩賜財団済生会 神奈川県病院

4003	愛知県がんセンター
4005	富山市立富山市民病院
4019	岐阜県立多治見病院
4050	甲府共立病院
4051	諏訪赤十字病院
4053	沼津市立病院
4054	医療法人豊田会刈谷総合病院
4055	国立三重中央病院
5022	和泉市立病院
5024	市立豊中病院
5047	社会福祉法人恩賜財団済生会滋賀県病院
5048	東大阪市立総合病院
5049	公立豊岡病院
5050	医療法人社団新日鐵広畑病院
5051	日本赤十字社和歌山医療センター
6008	香川県立中央病院
6025	松江赤十字病院
6026	労働福祉事業団香川労災病院
6027	徳島赤十字病院
7008	鹿児島市立病院
7018	国家公務員共済組合連合会浜の町病院
7020	医療法人原三信病院
7021	福岡赤十字病院
7022	国立熊本病院

第24回 認可 (16施設)

認定番号	病院名
1006	国立札幌病院
2029	米沢市立病院
3057	厚木市立病院
3104	国立栃木病院
3105	佐野厚生農業協同組合連合会 佐野厚生総合 病院
3106	桐生厚生総合病院
3107	富士重工業健康保険組合 総合太田病院
4059	国立松本病院
4060	済生会新潟第二病院
5007	兵庫県立尼崎病院
5063	社会保険神戸中央病院
5064	神戸市立西市民病院
5065	滋賀県立成人病センター
7025	公立八女総合病院
7026	医療法人白十字会 佐世保中央病院
7027	宮崎県立日南病院

5. 平成15年度登録施設更新機関

(第2, 4, 6, 8, 10, 12, 14, 16, 18, 20, 22, 24回
86施設)

期間(2年間)平成15年4月1日～平成17年3月31日

第2回 認可(6施設)

登録番号	病院名
3028	厚生中央病院
3029	川崎協同病院
4022	静岡赤十字病院
4023	浜松労災病院
4024	浜松赤十字病院
5018	(社)明石市医師会立明石医療センター

第4回 認可(5施設)

登録番号	病院名
5024	公立南丹病院
6011	水島協同病院
6012	高知赤十字病院
7015	医療法人社団新日鐵八幡記念病院
7018	宮崎社会保険病院

第6回 認可(7施設)

登録番号	病院名
2011	秋田県立脳血管研究センター
3036	医療法人社団江東病院
4002	市立島田市民病院
4028	市立岡谷病院
4030	高山赤十字病院
7021	公立学校共済組合九州中央病院
7025	総合病院鹿児島生協病院

第8回 認可(5施設)

登録番号	病院名
3051	埼玉社会保険病院
3055	横浜赤十字病院
5034	西宮市立中央病院
6014	高松市民病院
6016	下関市立中央病院

第10回 認可(8施設)

登録番号	病院名
3057	茨城県立こども病院
3058	神奈川県厚生農業協同組合連合会 伊勢原協同病院
3059	北里研究所病院
3060	神奈川県立循環器呼吸器病センター
4042	名古屋記念病院

5036	市立吹田市民病院
6017	高知市立市民病院
7030	鹿児島市医師会病院

第12回 認可(1施設)

登録番号	病院名
4047	医療法人(社団)中信勤労者医療協会松本協立 病院

第14回 認可(8施設)

登録番号	病院名
2016	津軽保健生活協同組合健生病院
5042	(財)甲南病院 加古川病院
5044	労働福祉事業団神戸労災病院
5045	西脇市立西脇病院
6018	岡山医療生活協同組合総合病院岡山協立病院
6019	財団法人永頼会松山市民病院
7033	国家公務員共済組合連合会新小倉病院
7034	労働福祉事業団熊本労災病院

第16回 認可(6施設)

登録番号	病院名
4058	愛知県厚生農業協同組合連合会加茂病院
4060	稲沢市民病院
6022	徳島県立中央病院
7037	福岡市立こども病院・感染症センター
7038	国立療養所福岡東病院
7039	医療法人同心会古賀総合病院

第18回 認可(9施設)

登録番号	病院名
3078	東芝病院
4064	長野県立こども病院
4065	土岐市立総合病院
4066	半田市立半田病院
5049	医療法人川崎病院
6024	鳥取市立病院
6025	国立福山病院
6029	済生会今治病院
7040	鹿児島県立大島病院

第20回 認可(5施設)

登録番号	病院名
3081	利根保健生活協同組合利根中央病院
4073	済生会松阪総合病院
5052	医療法人社団洛和会洛和会音羽病院
5054	ベルランド総合病院

6034 山陰労災病院

日本病理学会海外派遣事業 第三回派遣報告書
東京慈恵会医科大学第三病院, 病院病理部

福永 真治

第 22 回 認可 (13 施設)

登録番号 病院名

- 1018 苫小牧市立総合病院
- 2010 岩手県立宮古病院
- 4076 国立長野病院
- 4077 医療法人徳洲会名古屋徳洲会総合病院
- 5060 公立甲賀病院
- 5061 彦根市立病院
- 5062 医療法人誠光会草津総合病院
- 5065 医療法人きっこう会総合病院多根病院
- 6002 国家公務員共済組合連合会広島記念病院
- 6037 国立善通寺病院
- 6038 社会福祉法人済生会松山病院
- 6039 済生会西条病院
- 6040 愛媛県立今治病院

第 24 回 認可 (13 施設)

登録番号 病院名

- 1021 江別市立病院
- 1022 滝川市立病院
- 3088 公立藤岡総合病院
- 3089 国保八日市場市民総合病院
- 3090 国立横浜病院
- 3091 神奈川県厚生農業協同組合連合会相模原協同病院
- 3092 医療法人財団石心会 川崎幸病院
- 4083 磐田市立総合病院
- 4084 長野県厚生農業協同組合連合会小諸厚生総合病院
- 5068 社会福祉法人恩賜財団済生会京都府病院
- 6041 国立高知病院
- 6042 山口県厚生農業協同組合連合会周東総合病院
- 7049 千鳥橋病院

6. 第 3 回 (平成 13 年度) 海外派遣による香港病事情報の報告について

社団法人日本病理学会海外派遣事業は、本学会会員が病理学に関する海外の研究、教育、診療及び施設・設備等の事情視察を行う事業であり、第 3 回 (平成 13 年度) の派遣を実施した。この度その第 2 陣として香港を訪れた福永真治会員からその病事情報について詳細な報告があったのでここに掲載いたします。

訪問先: Department of Histopathology, Queen Elizabeth Hospital, Hong Kong

訪問期間: 2003 年 2 月 23 日~3 月 2 日

訪問目的: Department of Histopathology の実情視察

1. Queen Elizabeth Hospital (QEH) の概要

QEH は香港、九龍の商業地区に位置する香港最大の総合病院である。ベット数 1,800 で、香港特別政府区の公立病院であり、また Hong Kong University School of Medicine の教育病院でもある。1962 年、植民地の立場上英国式の病院として設立された。病院スタッフ全員が医療業務に携わり研究員は配属されていない。1997 年、香港が中国に返還されたが、外交と軍事以外は香港人の自治が認められ、言論や宗教の自由、法律、税制、通貨制度等、あらゆる面において中国本土とは異なる香港独自の政策や行政システムが貫かれている。その多くは英国植民地時代のシステムをそのまま踏襲しており、この病院自体も目立った変化は見られないと言う。Common Wealth である英国、豪州、ニュージーランド、シンガポール等との交流が盛んであるが、本土の医療従事者との交流は殆どない。Department of Histopathology では、中堅病理医一人が返還直前に米国に移民した以外大きな変化はない。当病院の悩みの種はやはり医療費の高騰であり、景気の低迷、中国本土よりの移住民の増加がその拍車を懸けつつある。現在、外来、入院、医療の内容を問わず、香港在住の患者は一律、一日約 US 10 ドルの個人負担で済む。しかし本土の住民、国外よりの勤務者、旅行者は初診時、最低 US 300 ないし 400 ドル請求される。Department of Pathology に関しては現在財政的な問題はなく、技師等の人員削減の恐れはないと言う。

2. 診断病理業務

地上 12 階、地下 2 階の白亜のビル全体を Department of Pathology と Laboratory Medicine が占め、9 階、10 階に Department of Histopathology がある。そのスタッフは 1 人の Consultant (診療部長) と 8 人の Registrar (医局員) よりなり、約 10 名の House Officer (研修病理医) がいる。女性病理医は約 30% である。責任者は Consultant である Dr. John K Chan。彼は世界有数の外科病理医で、卓越した診断能力と幅広い知識を有し、また高潔で人望高い。スタッフは、全員 Hong Kong University School of Medicine 出身で最高齢者は 40 歳代後半であり、比較的若年者で構成されており権威主義的な雰囲気は全然なく、合理的でまた high content な人間関係が形成されてる。彼等は謙虚な病理医でスタンドプレーをする者はいない。Clinical

Pathology のスタッフも含む多くの病理医と一緒に毎日異なった食堂での昼食は楽しくまた素晴らしい情報交換の場であった(場所柄廉価で美味しい食堂が多い)。

診断業務として年間約 28,000 件の生検, 手術例, 約 38,000 件の細胞診, 70 ないし 80 件の病理解剖, 300 ないし 400 例の行政解剖がある。やはり病理解剖は年々減少の傾向にある。解剖例の CPC は年 3 回ほどであり活発には行われていない様子。組織診断は毎日, スタッフ全員と House Officer でなされる。turn-around time (TAT) の短縮のため標本が出来次第, 数例単位で一日に何度も各病理医に提出される。診断は Computer のシステム上でなされ, 多くの場合その場で各自によって authorized される。肉眼所見や写真, 過去の病理診断はウェブサイト上で見られる。問題例は subspecialist の意見を仰ぐか午後 4 時から consensus meeting につけられる。日本ではほぼ日常化している検閲や二重チェックは稀で, 静かに淡々と診断業務がなされている。個人主義的な責任体制である。夕方 5 ないし 6 時にはほぼ全員帰宅する。切り出しは dictation system で行い, 術中迅速診断は, 米国と異なり本邦と同様に技師が薄切, 染色をしてる(各国, その州の法律に準じて)。剖検室は病院本棟の地下に位置し非常に広く 5 台の剖検台があるが, バイオハザード対策の台はない。剖検関係の paramedical が 10 数人配属されており, 廃液, 換気などは職場環境の regulation に則するよう十分に管理されている。電顕検索は主に腎生検のみであり一般の免疫染色で診断可能とのことで活発にはされていない。ちなみに, 多くの日本やイスラエルの病理医がしているアルバイトは誰もしていない。病理医の収入は物価を考慮するとほぼ米国の病理医とほぼ同じレベルであり, 社会的地位も高い。

最も感銘をうけたのは, Department of Histopathology の業務マニュアルである。ほぼすべての分野を網羅し精度管理は当然とし学会発表のノウハウ, audiovisual 機器の設置場所, その手引きまでに及ぶ 700 頁余の冊子である。切り出しの方法, 肉眼所見の取り方, 組織診断, 細胞診, 病理解剖, 法医解剖, 行政解剖, 免疫染色等の各論, 総論, 診断基準, 診断名の統一, 腫瘍分類, 診断報告様式(手術例の診断 format は乳癌と大腸癌しかない), 診断上の pitfall などきめ細かく記載されており, 数年ごとに更新されている。全員に業務マニュアルが配布され正に座右の書として重宝であり業務上の約 90% 以上の疑問点, 不明点はこの冊子で解決できる。スタッフが精魂をこめ作成した結果, 研修病理医の教育が統一化され手取り足取り教える必要がなくなったとの事。非常によく練れて優れた内容であり, 本邦でも極めて参考になりその市販が強く望まれる。しかし複雑な著作権問題が障害になりそうであり, また彼等にはそのようなビジネスには関心はなく, 診断の質を上げるのを最大の目標としている。診断上の仕事効率の意識が強く掲

示板には, cost performance の年推移のグラフが貼られている。

3. Quality control (QC) and Quality assurance (QA)

彼等の QC と QA の現状を紹介する。QC は QA の一部であり QA は 3 つに分けられる。(1) 診断業務以前になされるべき事項であり, 言わば組織の構想とシステムの確立を意味する。(2) 検体受け付けより診断報告までの実務的事項 (QC に相当)。(3) review と審査 (audit)。QC は一定以上の良質の標本作成と一定以上の診断精度を意味する。技師長によると短時間で適切に検体を処理し, 質の高い組織標本を作成する工夫を常にし, 病理医の遠慮のない注文を歓迎し不備な点の解析と改善に労を惜しまないとのことである。検体の紛失, 取り違い, コンタミネーションの防止には万全の注意を払っている。切片のマウント時, HE 染色後には, ID とブロックと HE 標本が一致するかどうか複数の技師が二重に確認し, また技師長が無作為に一定数の標本状態をチェックする。QEH には 15 人の技師がおりその半数以上は細胞診のスクリーナーを兼ねる。彼等各々の技量は日本の技師にはかなわないと思われるが, それをシステムと人員数で補っている。また詳細なマニュアルの存在も大きい。一方, 日本の病理技師には職人的な人が多いが, マニュアルが不十分であり配置転属時に困る事が稀ではない。免疫染色では, 必ず陽性コントロール切片(10 種類の正常組織ないし病変組織を羊膜で包み春巻状のパラフィンブロックを作成し薄切したもの)を同一スライドガラスにマウントし行う(下記の文献参照)。日常の免疫染色の 90% 以上においてこの切片一枚で陽性コントロールとして充当できる。良く工夫され筆者もそのブロックをいただいた。陰性コントロールは行っていない。尚, 3 台の自動免疫染色装置があり, その一台は Dr. Chan が寄付したものである。担当技師, 免疫染色の責任者と Dr. Chan が一緒に必ず毎日午後 4 頃, すべての免疫染色標本を review しその染色の状態を記録し, 必要であれば指示をだす。その後, 担当病理医に提出される。殆どが素晴らしい染色状態で目を見張り, 筆者の検査室の免疫染色がいかに poor であるか思い知らされた。コツは antigen retrieve にあるという。決して無理な評価はせず不良なものは, 翌日再染色される。Dr. Chan は免疫染色に極めて精通し一見免疫染色に依存しすぎの感があるが, そこには卓越した HE 標本の診断力の裏付けがある。尚, Dr. Chan への consultation は, 年間 700 ないし 800 例であり, その fee は無料であるが, 免疫染色施行した香港の他施設よりの症例は, その実費として香港 500 ドル(約 6 千円)請求している。

Review と審査 (audit) は, 毎月行われ TAT, surgical pathology audit (random case review), frozen section

audit, 研修医が単独で診断した症例の審査からなっている。漠然と討議されるのではなく、いずれも, benchmark (数値目標)が設定されそれとの比較で行われる。余程のことがない限り, benchmark が上げられても下げられることはない。benchmark は 'all embedded case' は 1.5 日以下, 'surgical cutting' case は 3.5 日以下である。細胞診では婦人科系は 4 日以下, 婦人科以外では 2 日以下, FNA は, 2.5 日以下である。Laboratory Information System に基づいて月単位で各病理医の平均値が報告され各自に配られる。また TAT-50, -80, -90 (50%, 80%, 90% の症例での数値) も算出され診断が遅い場合にはその理由がある程度反映される。surgical pathology audit では, consultant ないしそれに準じる病理医によって無作為の 2% の症例の標本と病理診断報告書 (computer 画面で) が review される。benchmark は major disagreement in diagnosis は 2.5% 以下 (1 通年で), significant typographic or grammatical error は 7.5% 以下, incorrect site code は 5% 以下である。その他, 肉眼所見の記載の状態, サンプルング方法の適否, ブロック数, 補助診断としての組織化学, 免疫染色施行の適否, 臨床医よりの質問, 問題点に回答しているかなども審査する。frozen section audit では, computer 検索で, frozen section diagnosis と final diagnosis との不一致例, 診断保留例を抽出し, その標本を consultant ないしそれに準じる病理医と病理研修医と一緒に review する。inappropriate deferral, minor disagreement, major disagreement の症例が分析される。尚, benchmark は, major disagreement は 3% まで, inappropriate deferral は 10% まで許容される (Association of Directors of Anatomic and Surgical Pathology. Am J Surg Pathol 1991; 15: 1007-1009)。研修医による単独診断の審査では, 水準以上の診断がなされているか, 研修, 経験年数の応じて単独診断症例が増加しているかについて検討される。彼等の単独診断症例数が算出され, またその 10% が無作為に抽出され review される。Clinical Audit Meeting ではその結果が匿名で発表される。Major disagreement は 5% 以下とされている。もしこの率が高い病理研修医には, 単独診断症例の削減とより一層の厳重な診断管理がなされる。この審査で研修病理医の診断力が数値としてあらわれ, また教育効果が反映される。また, external quality program として Hong Kong College of Pathologists その他による組織診断, 免疫組織化学, 細胞診の審査が年 3 ないし 4 回ある。

日本では想像出来ないような管理がなされ, 病理医の診断精度, 管理は数値として現われる。確かに合理的で診断基準の統一などが現場で十分なされ, 個々の診断力は卓越している。一方では学問としてまたロマンスとしての pathology を各病理医は望んでいると思われるが, それは

外部からは見えてこない。公立病院の立場上仕方ないのかもしれない。この傾向は米国の外科病理医にもあると思われる。

4. 卒後教育: 幅の広い病理学知識を有する診断病理医の育成を目的にしている。通常は anatomic pathology では, straight 6 年の研修であり, 診断病理が当然その大部分を占める。研修病理医は先輩の研修医に直接指導され, また各自がマニュアル, 教科書, study set で勉強し, スタッフが病理解剖以外, 手取り足取り教えることはない。また臨床とのカンファレンスは意外に少ない。前記の研修医が単独で診断した症例の審査で彼等の教育成果, 診断力は一目瞭然である。またこれにより競争心を煽っている。

5. 研究: PCR 等の増幅法や in site 法を主体とする分子生物学的検索の設備はほぼ完備しているがあくまでも病理診断の補助としての研究である。悪性リンパ腫などの血液学病理分野, 唾液腺, 甲状腺, 軟部腫瘍等の研究が活発である。米国のような research grant は殆どなく, 業者との関係もなく, 専属の研究員, 技師もいないが, 指導者である Dr. Chan はどの分野にも精通しているためか, 彼等は種々の分野の臨床病理学的研究を活発に行い業績も多い。その多くは理解しやすく情報源として素晴らしい。Clinical Pathology においても業績が多い。

6. 総括: 1. 英国式の公立病院, 2. スタッフが若い, 3. 極めて優れたマニュアル, 4. 徹底した精度管理, 5. 世界トップレベルの免疫組織化学, 6. 合理的で診断学重視した病理, がこの department の特徴である。卒前教育の義務がある大学付属病院とは環境が異なるが, 診断病理学また evidence based medicine の意識の強い比較的若い指導者なしには成立しないと思われる。また一方では実践的な診断病理学, 外科病理学の土壌と伝統が必要である。米国のレジデンス制は卒後教育として最高にレベルにあると言われるが, 包括的にはこの QEHL の Department of Histopathology は世界的レベルにあり, 同じ東洋人として同感するところ, 学ぶべき点が多い。

謝辞: 今回の海外派遣にあたり, 筆者を推挙して下さった日本病理学会理事長 森茂郎先生, 国際交流委員会の諸先生に厚くお礼を申し上げます。また快く受け入れて頂き, 多くのことを教えて下さった, Department of Histopathology, Queen Elizabeth Hospital, Hong Kong の Dr. Chan および各スタッフ病理医, 研修病理医, 技師の方々に深く感謝いたします。

QEHL では優れた部門の表彰があり, この Department of

Pathology は、毎年のように Best Award を受賞していることを最後に記す。

John KC, Wong SCS, Ku WT, Kwan MY. Reflections on the use of controls in immunohistochemistry and proposal for application of a multitissue spring-roll control block. Ann Diagn Pathol 4; 329-336, 2000.

7. 日本医学会より

日本医学会への加盟申請についての公示

平成 15 年 5 月 15 日

日本医学会

日本医学会への加盟申請については、日本医学会内規により下記のとおり公示する。

記

1. 加盟申請書受付期間

自 平成 15 年 5 月 15 日

至 平成 15 年 7 月 31 日

2. 加盟申請書には、概ね、下記の事項を記載または添付する。

- (1) 目的・沿革（学会設立年、歴史的経緯等）
- (2) 分科会としての独自性・存在の必要性
（国内の他学会との関係・関連分野の学会名）
- (3) 会員構成
 - ・会員総数
 - ・会員構成（医師、非医師の会員数、役員における医師・非医師の構成比率）
 - ・学会への会員入会資格
- (4) 学術集会（年間開催数、参加者概数）
- (5) 機関誌（英文誌・和文誌の最近 5 年間の年間発行回数、総頁数、発行部数）ならびに査読制度の有無
- (6) 国際性（国際学術集会の主催経験、国際学会との関連（支部等になっているか）、欧文機関誌の発行等）
- (7) 学会の運営状況（経理、役員構成）
- (8) 定款または会則
- (9) 役員名簿
- (10) その他参考となる事項

3. 加盟申請審査・決定時期（予定）

新規加盟審査委員会で審議の上、平成 16 年 2 月開催の日本医学会定例評議員会において審査決定する。ちなみに平成 14 年度は 1 学会のみであった。

4. 申請書類

申請書は、下記のとおり日本医学会事務局に返信用封筒（角 2 封筒に 160 円切手貼付）を添えて請求のこと。

[日本医学会]

〒 113-8621 東京都文京区本駒込 2-28-16

日本医師会館内

TEL 03-3946-2121(代) 内線 3241~2

お知らせ

1. 黒住医学研究振興財団第 11 回研究助成金の募集及び第 39 回（平成 15 年度）小島三郎記念文化賞の推薦について

申込み締切り：平成 15 年 6 月 27 日

連絡先：（財）黒住医学研究振興財団事務局

〒 113-8408 文京区本郷 1-33-8

TEL：03-3812-3173 FAX：03-3813-2206

2. 平成 15 年度日本医師会医学賞・日本医師会医学研究助成費候補の推薦について

申込み締切り：平成 15 年 7 月 2 日

連絡先：日本医師会生涯教育課

〒 113-8621 文京区本駒込 2-28-16

TEL：03-3946-2121（内線 3241~2）

3. 第 12 回（平成 15 年度）木原記念財団学術賞の受賞候補者推薦について

申込み締切り：平成 15 年 9 月 30 日

連絡先：（財）木原記念横浜生命科学振興財団

〒 244-0813 横浜市戸塚区舞岡町 641-12

TEL：045-825-3487 FAX：045-825-3307

4. 日本医学会シンポジウムについて

会 期：平成 15 年 6 月 12 日

会 場：日本医師会館 大講堂

連絡先：日本医師会館内

〒 113-8621 文京区本駒込 2-28-16

TEL：03-3946-2121

5. 千里ライフサイエンスシンポジウム「免疫制御と免疫疾患研究の最先端」について

会 期：平成 15 年 9 月 21 日

会 場：千里ライフサイエンスセンター

連絡先：（財）千里ライフサイエンス振興財団セミナー事務局

〒 560-0082 豊中市新千里東町 1-4-2

千里ライフサイエンスセンタービル

TEL：06-6873-2001 FAX：06-6873-2002

日本医学会だより

JAMS News

2003年5月 No. 29

日本医学会

〒113-8621 東京都文京区本駒込2-28-16
日本医師会館内 TEL 03-3946-2121(代)

第12回幹事会・第70回評議員会

標記幹事会・評議員会が定例のものとして、平成15年2月25日に開催された。そこで報告、審議された事項は両者ほとんど同様である。評議員会の冒頭、森医学会長の挨拶として、「昨今、社会が目まぐるしく変わりつつあり、医学・医療の面でも変化が大きく、かつ速い。日本医学会は今まで、学術団体としての純粋さを保ち、社会に向っては余り発言してこなかったが、今後とも果たしてこのような姿勢でよいのかとの意見も寄せられている」と述べた。

まず、4月開催予定の第26回総会について、その準備状況が杉岡会頭から報告された。

年次報告では、一般的な事業に関する説明があり、とくに平成14年6月開催の「日本医学会100周年記念式典ならびにシンポジウム」、11月開催の「日中医学大会2002」の報告が行われた。

審議事項としては、平成15年度事業計画が承認され、日本脳卒中学会が本年度の新規加盟学会に決定した。

なお、第27回総会は、平成19年4月6日～8日に開催の予定で、岸本忠三会頭の下、副会頭に野田起一郎氏・山本研二郎氏、準備委員長に堀正二氏が決定した。

第26回日本医学会総会

第26回日本医学会総会は福岡市において、杉岡洋一会頭の下、「人間科学 日本から世界へ—21世紀を拓く医学と医療 信頼と豊かさを求めて—」をメインテーマに、学術講演が

2003年4月4日から6日まで、学術・公開展示が4月2日から8日まで開催された。

講演としては、会頭講演：21世紀を拓く医学と医療(杉岡洋一会頭)、招待講演：ソフトレーザー脱離イオン化の応用(田中耕一氏)、記念講演：人間としての生と死(上田閑照氏)、閉会講演：地球と人類の未来…宇宙に生命は満ちあふれているか…(松井孝典氏)、公開講演：暗愁のゆくえ(五木寛之氏)などの他、22題の特別講演が行われた。また一般的な学術集合の内容は5本の柱立てで構成され、シンポジウムなど何れも充実した発表・討論であった。今回初めての試みとして、医学部学生の企画によるシンポジウムが開催された。

総会展示は、「すこやかメッセ2003」の愛称の下に、公開展示、学術展示が開催され、盛況裡に終了した。

本総会は、日本医学会100周年に最も近い時点に開催されたため、「日本医学会100周年記念総会」と称され、それを祝っての式典・記念講演が第2日に、皇太子殿下の行啓を仰いで挙行された。

杉岡会頭による会頭講演は、「20世紀における生命科学の飛躍的進歩は、遺伝子レベルの医学や再生医学など、従来の医療を全く変えかねない新たな変革をもたらしつつある。今やわれわれはその光と影両者の存在を十分に認識し、過去の科学技術の進歩と引き換えに人類が見失ったものにも考察を及ぼすだけの英知と見識が必要だろう」と述べ、とくに人を物としてとらえる傾向にあることに警鐘を鳴らした。

最終日の特別シンポジウム「日本の医療の将来」では、坂口 力厚生労働大臣はじめシンポジスト達の熱い論戦が展開され、とくに、混合診療、株式会社参入、医療財源などが主な論点であった。

閉会式では、森日本医学会長が挨拶の中で、日本医学会 100 年の歴史を振り返り、「わが国は、太古その文化の発祥をもっぱら大陸に求めて以来、常に先進国の進歩・長所に着目し、学ぶことに汲々としてきた感がある。第 26 回総会では、『日本から世界へ』という言葉が示すように、はじめて『受信』ではなく『発信』を旗印にした。これは大きな意識の転換である。日本流の生命科学を築き、世界に広めていただきたい」と、本総会の基本理念についての解釈を示し、総括とした。

登録者総数は 33,154 名であった。

第 123 回日本医学会シンポジウム

平成 15 年 6 月 12 日(木) (10:00~17:20)、日本医師会館において「ウイルス肝炎」が開催される。参加希望者は、日本医学会に郵便はがきで申し込まれたい(参加費無料)。

プログラムの概要は、下記のとおり。

I. わが国におけるウイルス性肝疾患の現状

1. 日本での急性肝炎の現状/岡部信彦(国立感染症研・感染症情報センター)
2. 日本での慢性肝疾患、特に肝がんの疫学的特徴/大島 明(大阪成人病センター・調査部)

II. 分子レベルからみた肝炎ウイルス

1. A 型および E 型肝炎ウイルスとその感染/岡本宏明(自治医大・ウイルス学)
2. B 型および C 型肝炎ウイルスとその感染/三代俊治(東芝病院・研究部)

III. 肝炎ウイルスと肝障害

1. C 型肝炎ウイルスゲノムの複製機構と感染による細胞増殖の制御/下遠野邦忠(京都大ウイルス研)
2. 肝炎ウイルス感染における免疫学的細胞障害機序/井廻道夫(昭和大・内科)

IV. ウイルス性肝疾患に対する治療の進歩

1. B 型肝炎治療;新たな展開—「抗ウイルス薬」を使用した最近の動向/佐田通夫(久留米大・内科)
2. C 型肝炎;癌発生の高危険群設定とその対応/小俣政男(東京大・消化器内科)
3. 肝臓治療の進歩—内科的治療/椎名秀一朗(東京大・消化器内科)
4. 肝臓治療の進歩—外科的治療/國土典宏(東京大・肝胆臓外科)

第 124 回日本医学会シンポジウム

標記シンポジウムは、「肥満の科学」を標題として、平成 15 年 8 月 29 日(金)~8 月 31 日(日)の間、パレスホテル箱根で開催される予定。参加者は招待された方に限られる。

日本医学会への加盟申請

平成 15 年度の新規加盟申請については、5 月 15 日公示され、7 月 31 日に締め切る。申請用紙は、日本医学会あて請求されたい。

医学賞・医学研究助成費

平成 15 年度日本医師会医学賞・医学研究助成費の推薦依頼を 5 月上旬に発送する。それぞれの要項概略は以下のとおりであるが、詳細は本会事務局に問い合わせられたい。

医学賞: 1. 日本医師会会員で、医学上重要な業績をあげた研究者を対象とする。2. 基礎医学・社会医学・臨床医学を通じ 3 名に授与する(副賞は 1 名 500 万円)。

医学研究助成費: 1. 日本医師会会員が行う医学上将来性に富む研究を対象とする。2. 基礎医学・社会医学・臨床医学を通じ 15 件に授与する(1 件 150 万円)。

なお、医学賞・医学研究助成費の申請には、日本医学会分科会長、全国大学医学部長・医科大学長、またはその他関係諸機関長の推薦を必要とする。